鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース
第81号
2016年5月1日

平成28年度年次総会研究発表・シンポジウム

川・海のめぐみと社叢　水郷の街 鹿嶋で

6月19日(日)午前10時から鹿島神宮(鹿嶋市)で

6月19日(日)に鹿島神宮(鹿嶋市)で開催される今年の年次総会・研究発表・シンポジウムの概要が別紙(３頁)の通り決まった。

総会に引き続いての研究発表では、発表に加えて、昨秋に実施した福島県における被災社叢調査の概要が報告される。さらにシンポジウムでは「川・海のめぐみと社叢」をテーマに、基調講演には桑子敏雄・東京工業大学教授が、パネルディスッカションでは鷲谷いずみ・中央大学教授、茂木栄・社叢学会理事・國學院大學教授などが、薗田稔・社叢学会理事長・京都大学名誉う教授のコーディネートのもと、水郷地帯の信仰と社叢がはぐくんだ文化・風土などについて議論する。

前日(18日)の見学会では、鹿島神宮を正式参拝した後、20万坪にも及ぶ社叢などを、たっぷり時間をかけて拝観する。午後からは香取神宮に向かい、正式参拝の後、境内や社叢を拝観。豊かな水に育まれた関東の二大社を隈なく拝観するまたとない機会になる。

なお、正会員で総会にご欠席の方は必ず委任状をお送り下さい。

追悼のことば

上田正昭前理事長を偲んで

NPO法人社叢学会　理事長　薗　田　　稔

小幡神社にて(2014年３月19日理事会の折に)

本学会の生みの親とも育ての親とも、かねて会員一同が敬愛して参りました上田正昭先生が帰幽されました。去る３月13日早朝、京都府亀岡市郊外のご自宅で大動脈瘤破裂のためご家族に見守られながら永眠されたと伺っています。謹んでご冥福をお祈りします。

享年88歳。世上ではご長寿とは申せ、最後の最期まで学問と社会貢献に尽くし切られた晩年を知る私どもにとっては、壮絶にして稀に見る偉大な人生の達人と讃嘆擱く能わざるものがあります。

顧みれば、今は顧問をお願いしている高名な建築学者の上田篤先生の提唱で、鎮守の森の学際的研究と保全活動を目指す本学会が平成14年(2002)５月に京都・賀茂御祖神社の糺の森に誕生した当初から、上田正昭先生は理事長の大役を引き受けられ、持ち前の該博な学識と見識で、つい一昨年まで本会を積極的に指導下さったのですが、近年来のご体調を考慮されて現役を引かれ、名誉顧問に留まって頂いておりました。

結びに、先生が本学会に遺されたご遺言とも目さるべき歌人としての名歌を紹介して追悼のことばに代えることにします。それは、先生が平成13年１月の宮中御歌会始に召人として詠進された和歌「山川も　草木も人も　共生の　命かがやけ　新しき世に」という絶唱です。

因みに、語句の「共生」は詠歌上音読みでしょうが、先生晩年の志操からすれば訓読みして「とも生き」ではなく「とも生み」と、私どもは銘記すべきでありましょう。

第68回　関西定例研究会　報告

2016年2月13日
（於　國學院大學）

ちんじゅの森の15年

講　　師：中尾　伊早子（NPO法人ちんじゅの森代表）

設立の経緯「千年シンポジウム」との出会い　平成５年の伊勢の式年遷宮の時に、神社本庁主催の「千年の森シンポジウム」に広告代理店から出向というかたちで携わったことがきっかけだった。バブル崩壊後の当時、他に関心が持てることもなく、神社のことも何もわからない状態で、それまで日本文化についても深く触れることはなかったように思う。

「千年シンポジウム」はあらゆる角度から森のことを考え、各方面の先生方が集結していたが、私は伊勢に行くのもはじめてで、ご遷宮のこともよく知らなかった。

神職の方に神宮を案内してもらった時のことである。とても暑い日だったが、ある橋を渡ると、とても気持ちの良い風が吹いていた。思わずそのことを口に出すと、「ここには風の神様が祀られているんですよ」と返事が返ってきた。まるで時間が止まったかのように感じながらご神前に向かうと、「風日祈宮」(かざひのみや)と書いてあった。千年以上前の人々と気持ちが重なった気がして、目に見えない風を神様として祀るという日本人の柔らかな感性が心に響いた。古の風景も同じだったのだろうと思うと感慨深かった。以来、風の神様を信奉し、心の拠りどころにしている。

森にある水や樹、自然の恵みに人が集まり、人が生きるために必要なものは、すべて森が与えてくれていると古の人々は知っていた。これらの知恵をどうやって伝えていこうかと考えたとき、広告代理店勤務の経験から、人が集まる場所作りをしようと思いついた。

その矢先、明治神宮で代々木の森造成から80周年の記念フォーラムが行われると聞いた。明治神宮は人工の森であるが、「森が作れるんだ」ということにとても勇気を与えられた。原宿という場所もあり、若者にも森の魅力を伝えやすいのではないかと、コンサートをしようと考えた。初めてのことでなかなか理解を得られず、悪戦苦闘の連続で1500人を集めたものの、大きな赤字を出してしまった。しかし、参加した方々からの大きな反響があり、一度きりのつもりが、継続して開催することとなり、NPO法人ちんじゅの森の設立となった。

ちんじゅの森の活動　「ちんじゅの森チャリティコンサート」を続けていく一方で、学生と共に鎮守の森CO_2調査を始め、メディアでも注目を集めた。靖国神社で始めた昔話(民話語り)は、若者二人と一から立ち上げ、始めは中々足を止めてもらえなかったが、やがて協力者が集まり、今では全国的な活動へと展開している。高台にあり近隣に高層ビルが立ち並ぶ赤坂日枝神社では、天に届きそうな立地のイメージから、「古夜 Inishie Night」として神話語りを始めた。

改めて古事記を読んでみると、難解で、屍から穀物ができるなど突拍子もなく、理解し難く思うこともあったが、これは生命の循環だと気づくと、神話も伝えていきたいことのひとつとなった。おかしな話だが、民話や神話をテーマにすると、文化でありながら宗教であると敬遠されることも多かった。そんな中で経済産業省の助成金で製作したDVD「伊勢 神々の国の物語」は海外の方にも喜ばれ、高い評価を得た。

どれも試行錯誤の中で地元の方々との交流から学び、多くの方を巻き込み、今日までやってきた。大切にしてきたのは、本に書かれていることではなく、人々が語り伝えてきたことだ。多感な世代の人達がどう表現し、今風にどう伝えていくか、切れないようにどう繋いで、引き継いでもらうかは大きな課題である。クオリティは落とさずに、感性が違っていても認めてやることも必要だ。NPO設立から20年に向けて、それぞれが20年後にステップアップした役割を引き継いでいくことの大切さは、ご遷宮から学んだことの一つであり、素晴らしい文化だと思う。

今後の活動としては、若い女性の参拝者が多い東京大神宮で、神様の恋愛を入口に、視野を広げてもらえるような寄り合いの場作りとして、サロン開催を予定している。ホームページでは、各地の風土や語り継がれてきたことを日本地図とともに掲載する「ちんじゅの森ロードマップ」を自身のライフワークとしていくつもりだが、ちんじゅの森の活動が次世代に引き継がれていくことを望んでいる。　　（文責・渡邊節子）

次回予告【第71回関西定例研究会】

◆日　　時：7月30日(土) 13：30～15：30
◆場　　所：伏見稲荷大社儀式殿（伏見区藪ノ内町68）
◆テ ー マ：春日大社の社叢・御蓋山ナギ林
◆講　　師：名波　哲（大阪市立大学大学院理学研究科准教授）
◆ｺﾒﾝﾃｰﾀ：前迫ゆり（社叢学会理事・大阪産業大学教授）

平成28年度年次総会の概要

参加ご希望の方は、6月10日(必着)にて、裏面申込用紙にご記入の上、FAXもしくは郵便にてお送りいただくか、同内容をMailにてお知らせください。

	時　間	内　　容
6月18日(土)見学会	10:30	鹿島神宮大鳥居前集合
	10:30～13:00	鹿島神宮正式参拝と境内拝観
	13:15～14:30	昼食後、専用バスにて香取神宮へ
	14:30～16:30	香取神宮正式参と拝観・解散（希望者は鹿島神宮へ）
	17:00	鹿島神宮着・解散
19日(日)総会・研究発表・シンポジウム	9:30～10:15	年次総会　於：鹿島神宮祈祷館
	10:20～12:00	研究発表 ・鹿島神宮本殿の向きと参道　岡野　眞 ・春日山照葉樹林におけるシカの影響 ーシカ柵実験区による植生回復の有効性と限界　前迫　ゆり ・東日本大震災における福島県被災地社叢調査報告　糸谷　正俊
	12:00～12:45	昼　食
	12:45～16:30 12:45～13:45 14:00～16:30	シンポジウム「森と海の文化　くらし・いのり・自然」 基調講演　桑子敏雄・東京工業大学教授 パネルディスカッション パネリスト：佐々木寧・埼玉大学名誉教授 笹生　衛・國學院大學教授 茂木　栄・社叢学会理事・國學院大學教授 広井良典・社叢学会理事・京都大学教授 コーディネータ：薗田　稔・社叢学会理事長・京都大学名誉教授
	16:30～18:00	懇親会

参加費(いずれもお1人)	見学会	懇親会	シンポジウム
正会員・協力会員・賛助会員	5,000円	3,000円	無料
市民会員	7,000円		
一般	8,000円	5,000円	500円

研究発表･シンポジウムと関連行事参加申込書

FAX：075-212-2916

＊　ご希望の行事の(　)欄に〇をおつけ下さい。同伴者がいらっしゃる場合は人数をお書き下さい。

(　　)見学会：同伴　　人　　(　　)懇親会：同伴　　人

(　　)研究発表・シンポジウム：同伴　　人

会員番号　　お名前

携帯電話番号・Mailアドレス等当日連絡先

鎮守の森だよりvol.81

鹿島神宮：茨城県鹿嶋市、利根川下流北岸の丘陵地に鎮座する常陸国一の宮。『常陸国風土記』に鎮座が確認される東国随一の古社で、祭神は武甕槌大神（たけみかづちのおおかみ）。香取神宮（千葉県香取市）、息栖神社（茨城県神栖市）とともに東国三社の一社。また、宮中の四方拝で遥拝される一社でもある。古代には朝廷から蝦夷の平定神として、藤原氏からは氏神として崇敬された。歴代の武家政権からも武神として崇敬され、本殿、社殿、楼門などは家康をはじめとする歴代徳川将軍によって造営された。

「日本三大楼門」の1つに数えられる楼門を入ると、参道は真っ直ぐ東へと伸びるが、社殿はその中ほどに北面する。多くの神社が南面を通例としており、北方の蝦夷を意識した配置ともいわれる。本殿の背後には樹齢が千年を超える樹高43mのスギの神木がそびえ立っている。なお、境内入り口の大鳥居（高さ:10.2m、幅:14.6m）は、以前は石鳥居であったが、東日本大震災により根元から倒壊したため、神宮境内から杉の巨木4本を伐り出して再建された。また、震災から1か月後、陸前高田市の今泉諏訪神社に祀られていた御札が鹿島灘に流れ着いて話題になった。

「韴霊剣（ふつのみたまのつるぎ）」という長大な直刀が国宝に、本殿・拝殿・楼門など社殿7棟が国の重要文化財に指定されている。また、鎮座地「三笠山（みかさやま）」は国の史跡に指定されている。境内の広さは約70haで、このうち約40haは鬱蒼とした社叢。「鹿島神宮樹叢」として茨城県指定天然記念物に指定されている。約800種の植物が生育しており、茨城県内では随一の常緑照葉樹林である。

「鹿島七不思議」（①要石（かなめいし）　②御手洗池（みたらしいけ）の水深　③末無川　④境内三笠山の藤の花　⑤鹿島灘の海鳴　⑥根上りの松　⑦松の箸）の1つに数えられている凹型の要石は、地震を起こす大鯰の頭を抑える杭であるという。なお、香取神宮には凸型の要石があり、こちらは鯰の尾を抑えていると言われる。双方ともに見た目は小さいが地中部分は大きく、決して抜くことはできないと言い伝えられている。

御手洗池は、古くは西の一の鳥居がある大船津から舟でこの地まで進み、潔斎をしてから神宮に参拝したと考えられており、「御手洗」の池名もそれに由来するとされている。池には南崖からの湧水が流れ込み、水深は1mほどで、大人が入っても子供が入ってもその水深は胸までの深さにしかならないといわれている。

藤原氏からの崇敬も強く、氏社として創建された奈良の春日大社では鹿島神が第一殿、香取神が第二殿に祀られ、第三殿の藤原氏の祖神である天児屋根命（あめのこやねのみこと）よりも上位に位置づけらている。767（神護景雲元）年に白い神鹿の背に鹿島神の分霊を乗せ、多くの鹿を引き連れて出発。1年かけて奈良まで行ったと伝えられており、奈良の鹿も鹿島神宮の発祥とされている。境内には鹿園があり、神の使いとして30数頭の日本鹿が飼育されている。

西の一の鳥居は北浦湖畔の鹿嶋市大船津の鰐川の中にある。現在の鳥居は2013（平成25）年6月の再建で、水上鳥居としては日本最大級。12年に1度の午年9月の御船祭の際には、御神輿を奉戴し、竜頭で飾り付けた御座船が供奉船を従えてここを出発する。鰐川から浪逆浦を経て香取市加藤洲の斎杭へ巡幸、香取神宮による御迎祭があり、鹿島、香取の祭神が水上で出会う。

……

香取神宮：千葉県佐原市、利根川下流の南岸の丘陵に鎮座する下総国一の宮。祭神は経津主大神（ふつぬしのおおかみ）。神武天皇18年に社殿の造営が伝えられる全国でも有数の古社で、宮中の四方拝で遥拝される一社。東国守護の武神として武士による崇敬も厚く、重要文化財の本殿、楼門などは５代徳川綱吉によって造営された。現在も武道分野からの信仰が篤い。

鹿島神宮と深い関係にあり、両神宮とも古来、朝廷からの崇敬の深い神社である。古代の関東東部には、現在の霞ヶ浦（西浦・北浦）・印旛沼・手賀沼を含む一帯に「香取海（かとりのうみ）」という内海が広がっており、両神宮はその入り口という地勢学的に重要な地に鎮座する。香取海はヤマト政権の蝦夷進出の輸送基地として機能したと見られており、朝廷の威を示す神として東北沿岸部の各地で分霊が祀られた。両神宮には毎年、朝廷から勅使として鹿島使（かしまづかい）と香取使（かとりづかい）の派遣があった。伊勢・近畿を除く地方への定期的な勅使派遣は両神宮の他は宇佐神宮（6年に1度）にしかなく、毎年の派遣は極めて異例。さらに『延喜式』神名帳で「神宮」と記されたのは大神宮（伊勢神宮内宮）・鹿島神宮・香取神宮の3社のみである。

神宮の鎮座する丘陵は、中央が低く周囲が高いという形状から「亀甲山（かめがせやま）」と呼ばれる。 拝殿前に立つ大杉は樹齢1,000年といわれる神木で、このほか多数のスギの巨木や、イヌマキ・モミ・クロマツの大木が生育している。高木層のみでなく亜高木層・低木層・林床にも多数の草木が生育しており、スギの老令林としては県内でも有数なものであるとして、千葉県指定天然記念物に指定されている。

文化財としては、海獣葡萄鏡（中国唐代）が国宝に、本殿・楼門、久安5（1149）年銘の双竜文鏡、古瀬戸狛犬（室町時代）が国の重要文化財に指定されている。

こちらでも式年神幸祭は12年に1度の午年の4月に行われ、同様に二人の大神が水上で出会う。

第7回社叢インストラクター資格認定試験問題

2016年3月5日　伏見稲荷大社にて実施

筆記試験Ⅰ【10:00～11:00】：下記のうち１題を選択し、指定の字数で記述（課題は事前に提示）配点＝100

論文１．あなたが住んでいるまちの社叢、あるいは近隣の町の社叢を１か所あげて、その現状、問題点を簡潔に記し、今後、その問題点の解決に向けて、社叢の専門家として取り組むべき対応策をあわせて1,500字程度で記述しなさい。
＜社叢の名称＞ ＜所在地＞ ＜現状と問題点＞ ＜取り組むべき対応策＞

論文２．祭礼、神事・仏事、あるいは仏典などに関係する植物はたくさんあります。社叢に自生するものもあるし、植栽されたものもあります。これらの植物名を10種あげ、どのように使われるか、1,500字程度で記述しなさい。

筆記試験Ⅱ【11:10～12:10】配点=100

1. 社叢の保全に係わる近年の課題を３つあげ、その内容について50字程度で記述しなさい。
2. 次の文章について、選択肢のなかから最も正しいと思われるものを選び、○をつけなさい。(振り仮名は省略)

　日本の神社や社叢のことについて記した最も重要な文献の一つに、『延喜式』がある。この書物そのものは政治執行マニュアルだが、そのなかに神祇官と呼ぶ官庁の関係事案として神社があげられており、そこに神社数が記載されている。それらを式内社と呼ぶが、そこには①(A,約３千社 B,約5千社 C,１万社 D,２万社)が記載されていて、これらの神社は当然社叢を備えていたことと思われる。もっとも、たとえば「宮中神」などがそれだが、これら式内社の神社すべてに社叢があったわけではないことにも注意が必要であろう。宮中神は文字通りに朝廷という政治中心に祀られた、政治性の高い神社であるから一般化はできないけれども、カミがモリを必須としないこともあったのである。

　神社がその政治性を高めた、つまりは政治のツール・手段に位置付けられた画期は、7世紀後半の②(A,推古天皇朝 B,天智天皇朝　C,天武天皇朝　D,聖武天皇朝）のことであった。当時は政教分離時代ではないから当たり前といえばそうなのだが、神社や社叢が政治とともにその足跡を歩んでいるという側面をも忘れてはならないだろう。

　神社数が爆発的に広がったひとつの画期は、平安時代の後半期である。さまざまな理由・事情はあるのだが、神社の経済基盤である③(A,荘園　B,公領　C,知行地　D,御恩地)が全国に設置されたためである。例外もあるけれども、この設置と同時にその神社の祭神が勧請されてそこに祀られるところとなった。当然勢力の大きい神社ほど広がっていくことになるわけだが、したがってそれは自然発生ではないから、当初から社叢があったかは疑わしいものもあることになる。ちなみに右に引いた平成の調査では、最大数を誇る神社の信仰は④（A,稲荷信仰　B,伊勢信仰　C,天神信仰　D,八幡信仰）であって、この信仰が新たな時代の担い手となった武士たちの篤い崇敬を受け、武家政権と密接な関係を保ったからであった。はやり時代のニーズによって神社の盛衰があったことをよく物語る。

　逆に平成の調査で最小の神社数の都道府県は、僅か11社しか存在しない⑤（A,鹿児島県　B,沖縄県　C,青森県　D,北海道）である。パーセンテージすらはじき出せないほどの数字なのだが、ではここではカミに対する人々の崇敬はないのか。

　そうではない。何よりもそれをよく示すのはウタキと呼ばれる信仰対象で、全県が神の地とも称されるほどいたるところにそれは存在し、篤い信仰がささげられ続けて今にいたっている。そのウタキには必ずモリが存在し、というよりもモリ自体が聖地として信仰の対象になっているのであり、神社や社叢を多面的な視点で考えねばならないことを私たちに語りかけているように思う。

3. 社叢学会は東日本大震災復興支援事業として被災地の社叢調査等を行っています。そこで明らかになった事項について、以下の記載で正しいものの番号に○を付けなさい。
   1. 岩手県や宮城県北部のリアス式海岸地域では、過去の津波の経験から、高台に神社・寺院が立地していることから、今回の大津波に対して、建物や社叢の被害はさほど大きくなかった。
   2. 従来から大津波からの避難地として認められていた神社・社叢は無く、したがって避難者はだれも神社境内に逃げなかった
   3. 宮城県から福島県にかけての平野部にある社叢は、大津波により社殿ともども多くが流出し、わずかに一部のマツやタブノキ等が残されたのみである。
   4. 今回の地震では、神社敷地内の施設や社叢とも、振動、揺れの被害は非常に少なかった
   5. 地震の際、火災が多くの地区で発生したが、社叢が火災の延焼を阻止した場所もある
   6. 残された社叢の現況調査では、基本的にスギの植林地が多かったが、ケヤキ、マツ、ツガ、モミ、アスナロ、タブノキ等の大木も見られ、自然性、歴史性が感じられた
   7. 大津波によりほとんどの樹林が流出した中で、社叢の一部が毅然として残ったことにより、被災地の方々を元気づけたものもあった
   8. 上記の残った社叢は、５年経った今もしっかりと保全され、一部は復興のシンボルとなっている
   9. 福島県の避難指示区域にある社叢は、基本的に誰も立ち寄ることが出来ないため、森林の荒廃化が危惧される
   10. 海岸部の社叢で残っているものは、タブノキ、アカガシ、ヤブツバキなど暖地性の植物も多く、温暖な地域であることが分かる
   11. 流出した神社や社叢は、現地で再建し、サクラ、ウメ、モミジなどの花木植栽により観光化を進めることで、復興に役立てるべきである
   12. 社叢を復活するには、当地の潜在自然植生の構成種であるタブノキ、シイ・カシ類、ヤブツバキ等の幼木を密植して自然遷移に任せ、照葉樹の森を目指すべきである

⇒４面に続く

4.つぎの写真は、東北大震災時に津波の影響を受けた東北地方の山祇神社です。

矢印の調査区で記録した以下の種組成と写真が示す構造から、本社叢がどのような森林であるかを概説した後、社叢管理としての視点を述べなさい。さらには社叢が地域に果たす役割について考えられることを述べなさい。（300字程度）

高木層：優占種=ケヤキ、高さ18m、植被率90%、ケヤキ（胸高直径28.9cm）／亜高木層：優占種=ヤブツバキ、高さ8m、植被率20%／低木層：イヌツゲ、ノイバラ、ヤツデ、ガマズミ、ニワトコ、クサギ、スギなど 優占種=ササ／草本層：ノブドウ、タラノキ、フジ、カモガヤ、ムクノキ、ムラサキシキブ 優占種=ササ／林縁部：アワブキ、エノキ、ウワミズザクラ、ミツバアケビ、スイカズラ、ヤブツバキ、マサキ、ツタウルシ、ネズミモチ、ケヤキ、ムクノキ

book book book book book book

日本の祭と神賑　　森田　玲　著

現代日本の祭を、神事と、それを彩る神賑行事に分類し、神輿や獅子、太鼓、地車などの祭具の役割や歴史を、多くの写真や図と共に、詳細に分析している。京都と大阪(摂津・河内・和泉)を中心に、人々が熱狂し、コミュニティの要ともなっている神賑行事の魅力を余すところなく伝えている。一方で、イベントとしての賑わいに重点が置かれ、神事の部分が軽んじられているのではないかという警鐘も鳴らしている。

筆者は祭囃子に欠かせない篠笛奏者として活躍する一方で、日本各地の祭をフィールドワークしている。今年の夏祭、本書で予習してから出かけるのも一興。　（創元社刊　定価2,000円＋税）

まるごと発見！　校庭の木・野山の木２　イチョウの絵本　　濱野　周泰　編

神社や寺院の境内にヌシのごとくそびえ立つイチョウは大都会でも見慣れた風景だろう。しかし、その誕生が３億年近く前に遡る、正に「生きた化石」であるイチョウが、その後の氷河期を生き抜いたものの、絶滅の寸前にまで追い遣られ、野生に生きるものは中国の奥地にわずかに残るだけの「絶滅危惧種」だということを知る人は少ないのではないか。この本は、絵本という子供向きの体裁をとり、ふんだんな写真でイチョウの進化や生態など、イチョウにまつわる学術的な知識をわかりやすく伝えている。

今年も若葉が芽吹いてきた。この本を読んで見るイチョウは、いつもとは少し違うものに見えるかもしれない。（農文協刊　定価2,700円＋税）

事務局から

● 再び、いえ三度、四度でしょうか、自然の脅威を見せつけられる災害が発生いたしました。会員の皆さま方におかれましてはご無事でいらっしゃいましたでしょうか。

当学会発足当初からの会員である阿蘇神社の楼門と拝殿大破のニュースには心潰れる思いがいたしました。また、一向に収まらない大地の揺れに人智を越えた天災への無力感を感じます。

この災害列島ともいえる地を選んだ祖先が自然とどう共生してきたのか、もう一度見つめ直す必要があるのかもしれません。

● 平成28年度(2016年4月～2017年3月)の会費の振替用紙を同封いたしました。払い込みには銀行振り込みもご利用いただけます。三菱東京UFJ銀行　京都支店　普通口座6720345　特定非営利活動法人社叢学会　理事長　薗田稔　です。また、銀行等から郵便局振替口座にお振り込み頂く場合は、099店　当座　0172640　特定非営利活動法人社叢学会 にお願いいたします。

● 今年の総会は、鹿島神宮と香取神宮のすべてをご覧になっていただくまたとない機会です。ぜひご参加ください。見学会等の参加費は、同封いたしました会費振替用紙の金額欄を修正してご利用ください。

編　集　後　記

まだかなぁ。。。今日、原稿が届かないと発送が連休明けヤムナシなんだけどなぁ。。。今年は総会開催日が遅いから連休明けでも充分間に合うんだけどさ。ダメもとで催促してみますかねっと。おっ！　捕まった(なかなか電話に出てくれないのよ、この人)。そこを何とか！とオニの催促。とってもいぢわるなヒトに見えるじゃん。ホントはジアイの天使なのに。。。　（藤岡　郁）

お詫びと訂正

『社叢学研究』14号の社叢学会顧問・役員一覧に間違いがありました。名誉顧問の項、久邇邦昭　神社本庁統理は、正しくは北白川道久　神社本庁統理です。誠に申し訳ありません。

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL075-212-2973　FAX075-212-2916
URL http://www.shasou.org　E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町1－1　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail shasougakkai@hotmail.com